

感覚と志向的意識

—— 能動的志向性と受動的志向性の同時的作動 ——

佐藤 幸三

フッサール現象学は初め直観の普遍的な妥当基礎づけを問題にした。そして、不明瞭な所与を明瞭にする方法論的な根拠づけを論じた。しかし、後に構成作用に時間概念が導入されるに至って、現象がどのように発生するかが問われることになる。静態的現象学と呼ばれる前者の視点と後者の発生的現象学的視点がともに対象構成にあたって重要な役割を果たすことは言うまでもないが、前者から後者へと立場が変遷するにともなうて、能動的な志向的作用が生じる場所としての意識に対する先意識の機能が新たに問われることになる。それは現象学においては所与をより現象に即した、現実的で内実のある所与として問うために必要な転位であった。現象学的方法論の変動は作用の対象面である素材の性格にも影響を与えている。もともと感覚としてあった所与は、それが対象化されるにしたがつて、意識野における素材となり非現実化してしまった。どうして、そうしたことが生じるのか。本論考は感覚素材の性格が変異する過程を追うことによって、感覚素材と志向的意識の関係を考察する。そして、どうすれば感覚的所与がふたたび現実的なものとして定立

しえるのか、その可能性をフッサールに即して模索する。

一、『論理学研究』における感覚概念の二義性

『論理学研究』(1901/02)では感覚は非志向的なものとされながら、志向的自我によってそれ自体としては捉えられないものとして把握されている。

一般に、感覚が意識されるのは、それが自我になんらかの刺激を与えているからである。自我はそれを受動的に受け取るが、この期のフッサールにとつて、感覚が志向的なものではないとされているのは「快感と痛みの感覚は、そうした感覚に基づいて築かれる作用性格が止んでいても持続しうる」(Hua., Bd. X, IX, 409)¹⁾と言われることから理解される。感覚は非志向的であり、自我による作用によつてはじめて捉えられるという性格のものではない。感覚は志向性を超えていて、作用によつてその性質等々が変わるといふようなものでもない。それはただ感じられるということのうちであり、もし感覚それ自体として把握されなければならぬとすれば把握作用

と感覚内容との間に隙間があつてはならない。フッサールはこうした事態を「私は固有の感覚作用というものをまったく認めないので、他の場合と同様にここでも痛みの感覚と痛みの感覚の〔内容〕を同一視する」(Hua. X IX, 408)と述べている。

感覚はそもそも対象的なものではない。だが、フッサールにおいては、非志向的な感覚は志向性の眼差しの下に置かれ、そして対象的なものと関係づけられてゆく。まず初めに、フッサールによれば、感覚は自我を刺激するが、しかし、その際、それは自我には「意識されてはいるが、しかし《それ自体》は知覚客体には《なっていない》感覚」という意味での内容の現存在(Hua. X IX, 395)と「まさに知覚客体」という意味での内容の現存在(『bd』傍線筆者)とに区別されて気づかれるという。このことは、知覚機能と感覚は異なるということの意味している。第二に、感覚が自我性を欠いた段階で自我を刺激するのに対して、志向性は「自我にとつての」対象を構成する。それは本来的に対象とは無関係の感覚を対象化し、実際の対象と関係づける。フッサールによれば対象構成にあつて志向的自我は感覚を必要とするが、しかし、その際、志向的自我は自我の特定の関心に基づいて機能するがゆえに感覚を部分的にしか捉えない。混濁として複合的なものである感覚が、対象的規定に向けての素材として呈小される場合には、感覚はその部分が注視されて対象化される。すなわち、知覚は感覚を規定的に捉えざるをえないので、感覚は感性的性質となる。たとえば、感覚における一架機が色や形といった徴表 Merkmal とよばれる感覚性質へと変容されて現出する。それゆえ、感覚は部分的に把握され、記述されるものでは

あつても、それ自体として把握されるものではない。最後に、対象は感覚された後で、改めて感性的性質の複合体として創造的に定立される。

意識が定立する対象は感覚全体をそのまま映したものではない。知覚は感覚を捉えるが、そもそもそれは対象を捉えることと同じではない。以上のように、「論理学研究」ではフッサールは感覚と対象の関係を明瞭にはしていない。次にこの問題が「純粹現象学と現象学的哲学の諸構想」第一巻においてどう扱われているか見てみよう。

二、「イデーニー」における感覚の与件化とその問題性

『論理学研究』では意識は感覚を部分的にしか捉えないので、意識において取り扱われる感覚素材は感覚そのものではないのに対して、「イデーニー」(93)では感覚作用は感覚内容からは判明に區別され、(感覚)作用とともに意識野に現出した感覚が感覚与件となる。このことの事象的意味を考えてみたい。

『イデーニー』において、能動的自我による構成の素材となるのは、それまで感覚内容として想定されていたものではなく、むしろ作用とともに感性的性質として定立された感覚与件である。作用すること一般は『イデーニー』ではノエシスと呼ばれ、その作用によって定立された感覚素材は感覚的ヒュレーと呼ばれる。ヒュレーとは、フッサールによれば知覚体験のなかで見出される「色のような何物か」(Hua. III, 226)である。作用の対象面であるノエマは「知覚された樹木そのもの」(『bd』)として知覚体験の本質に属するものであり、「知覚のうちには実的には含まれない」(『bd』)とい

う性格を有するがゆえに現実的対象とは遊離している。それゆえ、感覚的对象を把握することはノエマを探究することと同じではない。もし現実的具体的なものを対象とするなら、問われるべきは実的な成素をみずからに宿していると考えられるノエシスであり、それが有する感覚である。ノエマは体験よりは、むしろ意識、意味、ファントムなどとかかわりを持つ。

そうした連関の下にあつて、ヒュレーは、「あらゆるヒュレー的なものは具体的な体験に実的な成素部分として属するが、ヒュレーのうちで多様なものとして自らを〔呈示してくるもの〕、〔射映してくるもの〕はノエマに属しているのである」(Hua, III, 227)と言われるように、一方で体験のうちでの感性的素材という性格をもち、他方では意識野において対象構成にかかわるものとしての性格を持つのである。フッサールは感覚的ヒュレー(素材)と志向的モルフェー(形式)の統一を注目すべきこととして挙げているが(Hua, III, 191c)、ヒュレーは既にながしか形式化されたものであり、モルフェーの対極にあるとは言えない。その意味で、対象構成にあたってヒュレーがまつたき非主観的な素材としてふさわしいかどうか、疑問は残る。

『イデーニー』の枠組みを離れて考えてみれば、感覚は純粋に現在のなものとしてある。感覚は本来的に作用と内容の区別を含まず、ただ自我に感じられるものとしてある。ところで、フッサールが感覚に感覚作用を持ちこむということは、「作用する」が時間的経過を必要とするがゆえに感覚に時間を持ちこむということであり、その結果として、感覚されたものは時間的に構成された感覚素材とし

て扱われるようになる⁽⁵⁾。感覚作用とは、つまるところ、感覚の意識による、また意識への時間化である。感覚素材の意識における時間化とともに、静態的現象学に対する発生的現象学の考察が一九二五年頃から始まる。感覚されたものは、感覚とは異なったものとしての原印象 *Urimpression* となり、意識野における過去把持、もしくは未来予持のための素材ともなる。感覚は現実世界での現在であり、原印象は意識野の時間流における現在である。感覚と原印象はそれぞれどのようにかかわっているのだろうか。感覚はすべてが志向的作用の対象にはならないという意味で余剰(感覚されざるもの)をもち、また、原印象はその背景に触発的刺戟が生じなければ現出しないう過去把持と未来予持をもつ。現実的な感覚刺戟はたしかに意識野での連合を覚起する発端にはなる。その意味において「今、ここ」は外的地平と内的地平の接点となる可能性を秘めている。その接点において、所与は内的に構成的で、かつ外的には現実的なものとして与えられる可能性がある。

三、感覚と感覚与件の違いから感覚そのものに至る方途へ

『イデーニー』でフッサールが行ったように、感覚作用の結果である感覚与件(原印象)が統握のための原初的対象であるとするなら、我々に所与として与えられるのは、感覚そのものではなくて作用によって与えられた現出のみということになる。ここで、感覚そのものへ至る方途を探究してみよう。

把握されたものから現出そのものへと遡るといふ作業は、フッサールによれば「純粋に心的なものへの現象学的還元」(Hua, III,

40) によって可能になるとされる。だが、現象学的還元によって獲得されるものは、「白い紙の知覚体験において、より詳しくは、紙の白さという性質に関連づけられた知覚の構成要素において、適当に眼差しを向け変えることによって、我々は白という感覚与件を見出す」(Hua, III, 75)とあることから分かるように、感覚与件であり感覚それ自体ではない。感覚そのものは、したがって、現象学的還元によつては把握されない。

そこで、まさに作用するさなかにおいてしか感覚を感覚として感じられないとすれば、感覚そのものを把握するのに必要なことは志向的作用そのものを対象的に問わなければならないということである。しかし、ノエシスの作用、そしてそれと並行する把握作用そのものを把握しようとすれば、K・ヘルトが「生きた現在の謎」で明らかにした問題と並んで一つの問題が持ちあがる。ヘルトによれば、作動しているノエシスの自我は「あとから覚悟すること Nachgewahren」(L.G.94)によつてしか把握されない。感覚がノエシスの作用とともにあるとするなら、感覚も事後的にしか把握できないことになり、それは、まさに、今、ここにあるものである感覚をそのまま感じつつ把握することにはならないだろう。結局、感覚は感覚与件としてしか把握できないのだろうか。そこで、志向的作用そのものの性格について考えてみることにしたい。

感覚与件は意識野における対象構成にとつて原初的な構成要素であり、志向され、構成されたものから感覚与件への遡及は、心的なものへの現象学的還元であると言われた。フッサールは、心の学は「現実的にそれ自体を与える直観から」(Hua, VI, 226)、「根源的な

生活世界の経験から」(ibid.) 汲み取られなければならないと述べている。その言にしたがうなら、心的体験において我々は直接に感覚に触れることが可能になる。しかし、「心的体験とは、アプリアリな真理の主観的な経験である」(Vgl. Hua, IX, 26)と『F』られるように、フッサールにおいては、心的体験は本質的な体験でもある。ここから「現実的にそれ自体を与える直観」(Hua, VI, 226) は「心的なものに固有な本質的なもの」(ibid.) として捉えられている。すなわち、心的なものへの還元によつて得られるのは感性的で本質的な与件である。フッサールにおいては、心的体験は志向的性格をもつ。感覚と感覚与件がそれぞれ志向的作用に相前後する感覚素材であるとするば、その違いは非本質的なものと本質的なもの、規定されたものとの違いでもある。フッサール現象学にとつての直接的な所与とは感覚そのものではなくて志向性である (Vgl. Hua, VI, 236) が、志向性を問うことは、非本質的なものである感覚と本質的なものである感覚与件の違いを問うことでもある。志向性を通して両者を関係づけることが課題となる。

四、志向性における感覚と身体

非志向的なものとしての感覚は志向的作用に纏綿して現出する。感覚は身体に属していて自我に刺激を与え続けているが、自我は必ずしもそのすべてに気づいているわけではない。だが、それは気づかれた感覚の背後にあつて自我を刺激しつづけているはずである。このことを手がかりに感覚把握について論じてみよう。

感覚は志向されていらないものとして身体に属しつつ志向性の背後

にあり、志向性が生じるとともに現出するものとして先所与されている。それはまだ感覚されていないものとして、あるいは、意識されていないものとして自我に属しているが、自我に明確に意識されてはいない。すでに現出したものとして、あるいはいつか現出するものとしてある。フッサールにおいては志向的作用とともに「今、ここ」にある感覚が、原印象となり、時間的素材となり、その性格を変えざるをえないことはすでに明らかにした。内的時間意識の導人において、つねに現在のものとしてある感覚と意識的時間的な感覚ヒュレーとの関係が生じる。その時間的流れは、心的状態としては、「内在的な体験流の、すべての〔超越的〕存在が原表明によって最後には表明される体験流の、内在的に知覚可能な体験に他ならない」(Hua. IV, 131)。感覚は時間的なそのヒュレー化と並行して捉えられないだろうか。

フッサールによれば感覚とヒュレーの関係づけを可能にするのは身体物体 Leibkörper である。「主観はまたその身体を〔持ち〕、その身体とその心的体験は〔結びつけられている〕と言われる」(Hua. IV, 12)とあるように、身体は外的な事物でありながら心的な経験を可能ならしめるものとしてある。身体は事物であることによって「今、ここ」の感覚を持続的に担う。すなわち、「すべての身体感覚においては、たんに感覚が把握されるだけでなく、その感覚が、延長する秩序に正確に可能的に機能する持続の性格に対応する体系として統一的に把握されるということである」(Hua. IV, 154f)と言われるように、身体は感覚を継続的に経験する。それゆえ、「刺激作用は、(中略) 現出する身体物体と延長する秩序に属するものと

してある」(Hua. IV, 154)。そのことが可能なのは、ひとつにはキネステーズの感覚による。フッサールによれば、行動可能なものとしての身体は「もし…なら、…である」という現象的因果性のなかにあるものとしてキネステーズの感覚をもつ。「それは白らを呈示することなく、呈示することを可能にする」(Hua. X VI, 161)と言われる。曖昧な性格をもつ身体は、キネステーズの感覚が機能することにおいて身体として気づかれる。フッサールが例示しているところによれば、右手が左手に触れることによって、またその逆も成り立つことによって身体は触覚的に構成されると言う。しかし、それにもまして、右手が左手に触れるとき右手は感覚作用を遂行するものであると同時に感覚を受けるものとしてあるのではないか。すなわち、作用が感覚内容と合致する可能性があるのではないか。身体の構成は「連合的な統一において」(Hua. X V, 297) 成立するものとして規定的なものであり、その意味で身体が構成されるときは、心的経験の成立するときでもある。

フッサールによれば、キネステーズ的な感覚は、「キネティッシュな感覚をそれに付随した規定性へと、すなわち、ただ原理的にすべての諸感覚に近づきうるような主観化する規定性へと変化させる統握」(Hua. X VI, 163) を認容するという。その統握において感覚される具体的なものは形式的本質的なものと合致する。キネステーズの感覚において、「生きた現在」は感覚と感覚ヒュレー、すなわち、現実的な感覚と意識流の「契機である感覚の合致の場である。キネステーズの感覚は時間的延長とともにあり、「線上の多様性」(Hua. X VI, 170) のなかから諸感覚の統、を獲得する。

フッサールが述べるキネステーズ的感覚は感覺作用と感覺の一致を期待させる。だが、先にも述べたように、ノエシス的作用そのものは後からの覚認によってしか把握することができない。生きた現在には知覚に顕現している感覺と非主題的な知覚の統合としてある。その統合化という能動的作業は、フッサールによれば、「超越論的自我的原機能は現在化である」(L.G. 61) かぎりにおいて超越論的白我が「その多様な作用と受動的な諸触発の機能中心」(ibid. 63) として行うが、それ自身が時間とともに流れていることもあり、白我が機能しているということを見ることはできない。すなわち、超越論的自我は自ら作動している志向性そのものを見ることはできない。「機能する」ということに焦点を合わせるとき、志向性そのものを捉えるために、「自我」の存在からさらに遡って先自我的な匿名性の領域にこそ入っていかなければならない。

五、能動的志向性から受動的志向性へ

フッサールによれば、「すべての自我はその構成された周囲世界を非自我において持つ」(Hua. IV, 318)。このことは世界という客観的なものが非自我のうちにあって、自我に対抗しつつ自我を刺激するということを意味している。では、自我のうちに現れてくる非自我とはいかなる性格をもつか。原初的な感性的素材も、自我を刺激しつつ意識されることが前提されているものとして、自我のうちにありながら自我ではないものの領野に属しているのではないか。

フッサール現象学では「すべての注意作用には本質的に当の対象性に関しての構成的意識が先行している」(Hua. IV, 318) と述べら

れているように、触発的刺激はあらかじめ構成的統一のうちに規制されるものとして捉えられている。そうしたことが可能なのは、刺激するものがあらかじめ未来予持されているからである。フッサールは感性に関して、「理性の余韻を何も含まない原感性」(Hua. IV, 332) と「理性が産出したものから生起した副次的感性」(ibid.) を区別しているが、過去把持されたものを伴って自我を刺激するものは後者に属するであろう。過去把持されている対象の現出に関しては、自我はその対象をある程度予期しながら統握することができ、それに対して、「原感性は自我が原所持しているもの」(Hua. IV, 335) であり、「原感性、感覺等は内在的根拠から生起するのではなくて、心的傾向から生じる、それらは單純にそこにあるだけであり、現れる」(ibid.)。『イデーニ』では原感性と感覺は同等のものとして捉えられているが、そうしたままつき新奇なものが現出する受動性の領域には志向性の原領域があり、そこでは「『へ』の志向」というものが妥当しないとされる (Vgl. ibid.)。生きた現在の領域で自我はその志向性を作動させているが、その間も自我は触発を受けていて非志向的な志向性が働いているとは考えられないであろうか。フッサールも言うように、身体は心的なものと物理的なものという二つの性格をあわせもっている (Vgl. Hua. IV, 160)。志向的意識が働いている間でも物理的身体の機能が停止しているわけではない。

気づいたものしか把握できないという志向性が負う限界は、対象の側からの非志向的自我への働きかけに着目することによって乗り越えられるのではないか。能動的な作用、志向性において感覺が感覺として捉えられたいとするなら、感覺からの語りかけをそれとし

て受容することによって感覚そのものが把握されるのではないか。

そこにあるのは受動的にして能動的な把握である。受動的には、感覺素材は知覚に対して「連合 Association」という形式において自ら構成しつづ示すとされる。もし感覺素材それ自身が自己構成を行うなら、能動的志向的作用によって生じる知覚と感覺そのものとの溝は埋められるはずである。統握に対して觸発 Affektion は自我が注視している所与とは他の現出をも同時に自我にもたらしているはずである。だが、觸発において自我を刺激するものが、もしその刺激以前に志向的作用とともにすでに構成されていたものであるなら、その現出は純粹な感覺ではない。それはもともと感覺作用によって汲み取られた対象の一契機が実的なものとして対象化され、原印象として記憶のうちに置かれたものに他ならない。したがって、受動的志向性はそれが生じる以前に作動した能動的志向性を前提している。その意味において、感覺そのものに至るためには、さらに受動的な領域へと踏み込んでいかなければならない。

六、感覺そのものを志向的に捉える可能性としての衝動的志向性

感覺が感覺与件へと変容するにあたって、私の自我は感覺そのものを把握することは不可能であり、ノエシス的な作用のみが実的で対象構成のための素材を提供することは既に述べた。だが、ヘルトも言うように、自我は志向的作用における感覺を感覺そのものとして捉えることはできない。それは志向的作用そのものを反省的に捉えようとするところに原因があるのではないか。ここでは、反省作用が生じる以前の段階にあると考えられる衝動的志向性について論

じてみたい。

感覺はただ作用に対してのみ直接的であり、それゆえ非自我の作動する志向的作用においてのみ捉えられる可能性が開ける。だが、受動的志向性でさえ、それが過去に沈殿しているヒュレーを感覺素材としていらかぎりにおいて純粹に感覺を映すことはできない。それが不可能なのは、受動的志向性において現出する「連合」が意識に即した現象であるからである。連合とは内的時間意識において成立する現象であるが、「時間性はまさにどのような様式にあつても自我の能作である」(Ms.C17 IV, 5, 1932)。能動的作用を前提とする志向性において感覺をそれとして捉えることはできない。

これに対して、意識される以前の感覺を志向的に捉えるという可能性は衝動的志向性において開ける。フッサールによれば、衝動的志向性は「經驗を通じての身体性の構成を形成する本能、衝動」(III, 9, 1933)にかかわる志向性であり、志向的作用における最も原初的段階にあるものとして本能にかかわる。そして、その性格は「知覚されていない現在のドクサには、やはり、生きた知覚現在との関係が存している、知覚現在はその直接的で生きた衝動志向性を伴っている。そして、「私はそちらに行くことができ、それを見る」という意識は、まだ見られていないが、ともに含まれている」(AVII, 13, 21, 1921-30)と言われることから理解されるように、まだ顕現していないものとの連合への衝動なのである。衝動的志向性においてはもともと未来予想的に構成が予料されているわけではないということは次のことから明らかである。

「発生の構成的経過は、本源的な衝動性から生ずるのであり、そ

の衝動的なかでキネステゼ的、主観的な運動が現に（感覚像）を伴いながら経過する。したがって、本源的な目標を欠く運動志向性から生ずるこの志向性は、最適なものに向きをとる。最適なものを類似化の進展を通じて一貫して志向する持続的な志向性、目的をもった志向性となる」（A VIII 3, 23a, 1921）。

すなわち、衝動的志向性ははじめからある特定の同一化に向けて働いているわけではない。そうした衝動的志向性において、志向的作用と並行して構成されている像そのものを問いの対象とすることが可能である。フッサールは行動の主体としての自我はそのつど生きた今をそのつどの諸触発と諸作用とともに生き抜くと言う（vgl. Hua, XV, 148）。ただ意識野のみにおいて作用を問おうとすれば、ノエシスの自我を反省的、事後的に把握せざるをえない。自我が作用を生き抜くというのは、意識における受動的連合ではなく、作用を身体において問うことにおいて開けてくる。このように能動的志向性の受動的志向性との統合は、意識野においてではなく、意識と身体の関係において可能になることをフッサールは示唆している。

まとめ

知覚されるものは知覚作用以上のものである。知覚されるものを知覚されるままに構成しようとするなら、受動的な志向性こそが問われなければならない。しかも具体的に現実的な事物にできるだけ近づこうとするなら、作動している志向性そのものが志向されなければならぬ。アルメイダは志向的作用の性格について次のように

述べている。

「諸要素の統一を企てる精神的な眼差しは、受動的に機能する。それで、あらゆる感性的徴表はそれ自体で浮き上がるが、この徴表の統一を同時にあらゆる他の徴表の統一とともに思念することによって、その眼差しは自発的にも機能する。受動的で能動的という二重の仕方で機能する作用のこの理念に、最も意義深い現象学的発見のひとつがあるということは疑いがない」。

志向性は能動的であり受動的でもある。しかもその同時的であることが衝動的志向性の本質的な性格を形成している。能動的志向性と受動的志向性は互いに他方を不可欠のものとしている。ただ、本論でも触れたが、志向的作用が反省的な作用になってしまうのは、その能動的か、受動的かのいずれかに偏ってしまうことに原因がある。

フッサールは感性的素材と意味の関係について次のように述べている。

「純粋な感覚対象（純粋な事象）の対象の意味は、二度と感性的には総合されない諸要素の総合である。その要素とは最新の感性的徴表である」（Hua, IV, 19）。

すなわち、感性的なものと意味は位層としては異なる。しかし、もし、両者の間の差異を認めてしまつたら、受動的な作用と能動的な作用で異なった感性的素材を用いることをも認めてしまうことになりはしないか。事実、フッサール現象学では受動的な作用での感覚は具体的であるのに対して、能動的な作用における感覚は意味と同等の役割が担わされてしまっているきらいがある。そうした事態は、実は意

識においてはノエシス的作用そのものが反省的にしか把握できない、という事情から生じている。ヘルトは「流れることをその原受動性において問うことは、同時にその先時間化しながら流れている生の流れを、それが生じるままにしているときに自我を問うことであるが、それは謎のままである」(L.G. 103)と言う。しかし、生の流れを生じるにまかせている間でも身体は刺激を受けていて、それは中断されているわけではない。自我はその時点でも非自我的なものとして機能しているはずである。リーによれば、先自我は「根源的な本能の盲目的斜光の中心」⁽¹⁾としてある。感覚と身体は、今、ここにある。感覚を受けているものとしての身体を問うことが不可能であるわけではない。身体と先自我との関係についてはいざれ改めて問うことにしたい。

キネステーズの感覚は行動する主体に伴うものとして能動的であるが、身体はいつも受容している体系である。諸作用を生き抜くというのは、つねに新たなものを感覚するということであり、それは、「もし、私がキネステーズを展開させるなら、他の像が打ち立てられるのは私の能力以外のことである」⁽²⁾というのと同意味である。感覚は身体レベルで生じている。それから、「しばらくのあいだ、知覚経過が流れ出て…、予期は相反し、(他である)ことの意識が現れる」(Hua. XI, 29)。感覚的刺激は予期に反して、つねに意外なものとして現れる。

註

(1) Husserliana-Gesammelte Werkeの略。以下、同文献からの引

用についてはHua.と略し、巻数と頁数のみ表記する。

(2) 感覚と知覚の関係は「外的な対象(家)が知覚されているとき、その知覚のなかで、現表象する感覚は体験されているが、しかし、知覚はされていない。家の実在について欺かれても、(体験された感性的内容)の実在については欺かれな」(Hua. IX, 767)という記述に於いてさらに明確になると思われる。

(3) 『論理学研究』では「感覚それ自体は作用ではないが、感覚とともに作用は構成される」(Hua. IX, 406)と「われるが、感覚そのものが作用の対象となるわけではない」。

(4) 『純粹現象学と現象学的哲学の諸構想』Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie 74 Hua. III, Hua. IVに該当する。この書に関しては、以下、それぞれイデーナー、イデーナーIIと表記する。

(5) 「感覚作用を我々は根源的な時間意識と見なしているのである」(Hua. X, 107)と述べられていることから、感覚が作用を受けるに至って意識野に置かれることが理解される。

(6) Klaus Held, Lebendige Gegenwart, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1966, S. 94f. 以下、同書からの引用についてはL.G.と略して表記する。

(7) 感覚は「一、外的事物の徴表、二、身体客観の感覚の、重感覚として統握される。たとえば、右手で左手に触れるとき、身体は触覚的にそれとして構成される」(Vgl. Hua., IV, 147, Hua., XV, 297f.)

(8) L.G. 101からの再引用。

- (9) 山口一郎『他者経験の現象学』国文社、東京、一九八五、一〇頁からの再引用。
- (10) Nam-In Lee, Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte, Kluwer, Dordrecht, 1993, S. 92 からの再引用。
- (11) 山口'前掲書'……一頁からの再引用。
- (12) Guido Antônio de Almeida, Sinn und Inhalt in der Genetischen Phänomenologie E.Husserls, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1972, S. 53.
- (13) Lee, op. cit, S. 214.
- (14) E. Husserl, Erfahrung und Urteil, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1985, S. 89.

(坂本洋一・川口洋一) 筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)